

第14回夏期福音特別集会（4）

一切の秘訣——ピリピ書第4章

1967年8月27日

小池辰雄

神の深いご計画 包摂 主を正眼に見る 根源現実 始めに本願あり 神の平安 神の歴史
（幕屋） 図 一切の秘訣 文殊菩薩 而無不能也 天下大治 聖霊の喜悅 終末的歡喜 羔の
婚姻 歡喜に寄す 喜びの音信

【ピリピ4】

1 この故に我が愛するところ慕うところの兄弟、われの喜悅^{よろこび}われの冠冕^{かんむり}たる愛する者よ、斯くのごとく主にありて堅く立て。

2 我ユウオデヤに勧め^{すす}メントケに勧め^{すす}む、主にありて心を同じうせんことを。

3 また真実に我と軛^{くびき}を共にする者よ、なんじに求む。この二人の女を助けよ。彼らはクレメンス其のほか生命の書に名を録されたる我が同労者と同じく、福音のために我とともに勤めたり。

4 汝ら常に主にありて喜べ、我また言う、なんじら喜べ。5 凡ての人に汝らの寛容を知らしめよ、主は近し。6 何事をも思い煩うな、ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。7 さらに凡て人の思にすぐる神の平安は、汝らの心と思とをキリスト・イエスによりて守らん。

8 終に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞^{よめいぶん}あること、如何なる徳いかなる誉にても、汝等これを念え^{おも}。9 なんじら我に学びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆おこなえ、さらば平和の神なんじらと偕^いに在^{いま}さん。

10 汝らが我を思う心の今また萌^もしたるを、われ主にありて甚^{いた}く喜ぶ。汝らは固^{もと}より我を思いいたるなれど、機^{おり}を得ざりしなり。11 われ窮乏^{きうふ}によりて之を言うにあらず、我は如何なる状^{さう}に居るとも、足ることを学びたればなり。12 我は卑賤^{いやしき}におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。13 我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。14 されど汝らが我が患難^{なやみ}に与^{あずか}りしは善き事なり。15 ピリピ人よ、汝らも知る、わが汝らに福音を伝うる始マケドニヤを離れ去るとき、授受^{やりとり}して我が事に与^{あずか}りしは、汝等のみにして、



他の教会には無かりき。¹⁶ 汝らは我がテサロニケに居りし時に、一度ならず二度までも我が窮乏^{ともしき}に物贈れり。¹⁷ これ贈物を求むるにあらず、唯なんじらの益となる実の繁からんことを求むるなり。¹⁸ 我には凡ての物そなわりて余りあり、既にエパフロデトより汝らの贈物を受けたれば、飽き足れり。これは香^{こうばし}しき香^{におい}にして神の享^うけ給うところ、喜びたもう所の供物なり。¹⁹ かくてわが神は己の富に随い、キリスト・イエスによりて汝らの凡ての窮乏^{ともしき}を栄光のうちに補い給わん。²⁰ 願わくは栄光世々限りなく、我らの父なる神にあれ、アアメン。

²¹ 汝らキリスト・イエスに在りて聖徒おのおのに安否を問え、我と偕にある兄弟たち汝らに安否を問う。²² 凡ての聖徒、殊にカイザルの家のもの、汝らに安否を問う。

²³ 願わくは主イエス・キリストの恩恵^{めぐみ}、なんじらの霊と偕に在らんことを。

●神の深いご計画

私は、落弟しつぱなしの望みなきひとで、望みなきところになお望みをくださっている方、それで生きているわけであります。皆さんも、非常に気が楽になったと思います。第一回でこの高原に来て、第二楽章でどん底に、谷底に下つて、第三楽章で煉獄の頂上に来ました。あとはもう行く所はない。今日は天界に昇る。

黙示録7章14節から17節は、読むたびに、本当にこういう大自然に入れられた心地に、それ以上の心地になるところです。

7章14節という数が、藤井武先生が7月14日に仆れた、そのことと私は思いあわせるんです。あの時はものすごい暑い日でありましたが、藤井武先生は最後に腰ひきからげて、天の一角をにらんで、こぶしをあげて、翔^{あまが}ける姿であつたという。子供たちを一人ひとりじつと見すえて、さよならの挨拶をされたんでしょう。そういう先生に私はとにかく五年間ついて、何といつても、藤井先生を先生としたことは、かけがえのない神さまの恩寵だと、今でも思っています。

あの『羔の婚姻』という偉大な詩は、ダンテの『神曲』、ミルトンの『パラダイス・ロスト』、これと並び称せられて、ひけをとらない内容のものです。しかし、これが未完成である。先生がもう2年、生きておられたらば、完成するところであつた。けれども、神さまはこれを未完成をもつて残されたというところに、何か深いご計画があるように思われます。私たちは、次から次へとバトンタッチしながら、この神の国建設の神さまのみわざに参与して行く一環一環である。皆さんも、その責任と光栄とを持って、いよいよ進んでください。もうこの福音にぶつかって、退いたら、行くところないですよ。



●包摂

ピリピ書4章に行きます。

1 この故に我が愛するところ慕うところの兄弟、われの喜悦^{よろこび}われの冠冕^{かんむり}たる愛する者よ、

なんとパウロはピリピの教会の群を本当に主の故に、福音の故に愛していたか。この愛は本当にパウロの悲願のかかつている言葉である。

斯くのごとく主にありて堅く立て。

主の中に入っておれば大丈夫、不動である。

2 我ユウオデヤに勧めスントケに勧む、

これは女性の名前です。

主にありて心を同じうせんことを。3 また真実に我と軛^{くびき}を共にする者よ、

「くびき」というのは、牛が二つ並んで一緒に進んで行く。だから本来、共同の気持を持っている。私たちは共に福音のためにくびきをつけて、十字架を共にして進んで行くというわけですね。

なんじに求む。この二人の女を助けよ。彼らはクレメンス其のほか生命の書に名を録されたる我が同労者と同じく、福音のために我とともに勤めたり。

4 汝ら常に主にありて喜べ、

「常に」ですから例外なし。涙は、いいですよ、悲しいときには。

「幸いなるかな悲しむ者、その人は慰められん」

という。けれども、涙を通し、苦難を通し、ゆきづまりを通して、必ず喜びに入る。詩篇を見ていると、始めに、

「わが神、わが神、何ぞ我を捨て給いし」

と叫ぶかと思えば、あの22篇の終りは讃美に終っている。

ついでに言いますが、「わが神、わが神、何ぞ我を捨て給いし」という十字架上のおどろくべき言葉は、天地を貫くところの義の叫びなんです。

「この神との関係の義が、もしくずれたら、もう世界はどうにもならん。この義を立てているのが私の使命であつた」

と、キリストは。

「あなたの義を立てたこの私を何故捨て給うか」

と、これは神の義に対するキリストの義憤の叫びなんです。この叫びあればこそ、救いが救いなんです。いわゆる「大慈大悲」ではない。本当にどん底から私たちを洗い清めてくださる。この義が貫かれてこそ、真の贖罪^{あがない}があるというわけでありまして、この世の中は非常に不公平に満ちたり、矛盾に満ちたようだが、絶対にそのままに終るものではない。

4 汝ら常に主にありて喜べ、



「主にありて」は実はちよつと弱い。「主を喜べ」でいい。

「汝ら常に主を喜べ、常に主を喜びとせよ」

と。主を喜ぶ。わが喜びは主なりと。

「わが喜び、わが望み、わが命の主よ

昼たたえ、夜うたい、なお足らぬを思う。」(讃美歌527番)

という讃美歌がある。あれは藤井先生の大好きな讃美歌ですが。

汝ら常に主を喜べ、我また言う、なんじら喜べ。⁵ 凡ての人に汝らの寛容を

知らしめよ、

「寛容」という言葉がちよつと弱い。私ならば「包摂」と訳す。それ程の意味はここはなにかも知れないけれども、一切を包んでしまう。「清濁あわせ呑む」という言葉があるけれど、この福音の包摂は包^つんでしまうと、中でみんな溶かしてしまう。聖と愛と光の世界。そういう世界に溶かす包摂なんです。

●主を正眼に見る

主は近し。⁶ 何事をも思い煩うな、

「汝ら思い煩うな」

と、キリストの言われた言そのまま。思い煩い、心配、疑い、恐れ、みんなこれはダメです。自分自身を見たら、心配、うたがい、おそれが渦巻きますよ。もうよしでしょうね、そんなのは。

主を見ている。主を正眼に見る。まともに主を見奉る。そこには一切のものが消えてしまう。ペテロも、波を渡って来たキリストに、始めは幽霊か変化の者かと思つたら、

「我なり、おそろな、心安かれ。私だよ、こわがるな、安心しろ」

と言われ、

「ああそうですか、あなたでしたか、では行かしてください」

と。あいかわらず、ペテロ式なんです。

「来たれ!」

と。「来たれ」と言つた時に、ペテロは主をまともに見て向かつて行きました。もう波があらうが風があらうが、彼は渡りました。ところが——人間ペテロはまたちよつと波みたいな人だから——風が来たもんだから恐れた。さかまく波だから、おぼれてしまうというわけだ。「SOS! 助けてください」と。みたまが来ても、なかなかこれが、常にみたまが内住している世界に入っていないと、また瞬間にすぐその中に入る気合いを受けとっていないと、ダメになってしまう。

「何事をも思い煩うな」

と。パウロも鍛えられたですよ、非常に。いろんなことで鍛えられて、



「すでに得たりと思わず、追求して止まず」

と第3章でも言っている通りこれでいいなんてところは地上では有りませんから。満たされつつ、いよいよ満たしを求めて行く。

●根源現実

ただ事ごとに祈をなし、願をなし、感謝して汝らの求を神に告げよ。

主を求めあてとしている祈りは、自分に執着しない祈りになって行くわけです。自分に執着した、何か自分を立てた祈りは、主が手段になってしまいうからだめです。「主」というのは、どこまでも主であり主格なんだから。こっちは客体で、「僕」なんだから。主を求めるということは、もう主中心ということになるから、自分の求めが、どんなに自分に即したことでありましても、それがみな主において主に即するものに変えられていく祈りになっていくから、成就していく。

「どうぞ私の祈りをお聴きください。福音のために私は本当にお役に立ちたい、主のためにお役に立ちたい」

と、一切の思いが主中心に動くような祈りになって来ますから、祈りそれ自身に力が入ってくるわけです。祈りの時には、「であろう」式の祈りをしたらだめですよ。

「祈りたることは、すでに聴かれたりとせよ」

と、キリストは現在完了で進んで行く。根源現実において現在完了で進んで行く。根源現実においては聴かれている。いや、実に祈り以上に聴かれている。我々の祈り以上にキリストは聴き給う。

見たところ聴かれてないようだけれど、逆にキリストは聴いている。

「お前の祈りはちよつとそれは……」

というわけで、現象面では反対のことをなさるかも知れない。けれども、

「主さま、あなたは私の願い以上の事をなしていらつしやる」

と言つて、願い以上のことを聴かれている。ああ素晴らしいことをするなあ。

●始めに本願あり

「始めに言あり」

というけれども、私は今日初めて言います、

「始めに本願あり。この本願は神と共にあり、本願は神である」

と。この「本願」は主自身の祈りである。主自身の私たちに対する祈りがこの「言」である。主の言は私たちに向つて実力を持つて進んで行く。

ベルナルという中世の神秘家が、

「我々の言の奥に行為がなくてはいかん。行為は言のもとである」



と言った。すばらしい言葉です。ゲートも、

「始めに行為ありき」

とファウストをして訳させた。ベルナルがもう一つ言った、

「行為のもとに祈りあり」

と。また、祈りそのものが、ある意味において行為です。なぜなら、祈りとは、全身を投げ入れることが祈りである。体でぶちあたることが祈りである。ですから、この祈りが直ちに即、行であり、即、言であるというように移って来る。

「始めに本願あり」とは、本願なくしてこの万象が創造されるか。「願いをなし」というけれども、神さまの側から「始めに本願あり」である。今日は私は初めてこういうことを申します。

●神の平安

7 さらば凡て人の思にすぐる神の平安は、

いや実に汝自身の思いにすぐるところの神の平安、キリストの平安は、

汝らの心と思いをキリスト・イエスによりて守らん。

まずパウロの言はもうその中から発している。お説教でも何でも無い。彼はもうそれに乗っかって信仰告白です。

8 終に言わん、兄弟よ、凡そ真なること、凡そ尊ぶべきこと、凡そ正しきこと、

凡そ潔きこと、凡そ愛すべきこと、凡そ令聞あること、

「聞こえ」というのは、もちろんパウロは、正しい意味において、本当のきこえという意味で言っているわけで、いわゆる空名ではない。

如何なる徳いかなる誉にても、汝等これを念え。

ここにパウロの大きさがある。それが、ファイイ教であろうと、仏教であろうと。孔子であろうと、老子であろうと、何であろうと。ソクラテスであろうと、カントであろうと。ベートーベンであろうと、レンブラントであろうと、何であろうと。およそ偽りでないもの、インチキでないもの、みなこれを尊べと。これは私心がないからです。私心のない、いわゆる主観のない目をもって見ている。詩篇の中にもあるとおり、

「太陽の光で光を見る」

と。神の光で真理の光の世界を見ている。福音の光で、およそ光あること、まことなるものが見えてくる。そしてその中に——自分ではないのだから——「ああ、結構である」と、虚心担懷にこれを受けとる。しかもまた、その姿、その限界もみな見えてくる。一切のものを伸ばす。あの「ジンクレティスムス」(諸派統合)というように、いろんな宗教を混ぜあわせて何かでつち上げるような、そんなことじゃない。

キリストのこの福音は最高の真理の、最高の光でもって一切のものを包摂していくんで



す。そして、全部その中に位置づけ、オリエンテーレンして、かつそれをさらに伸ばしていく。また、変質変貌させていく。

一切のものを塵芥としたパウロはキリストを受けとつたらば、今度は本当にすべてのものを活かすことになってくる。いわゆる相対の世界でいろいろ分析・総合統一なんてしたって、そんなことじゃない。

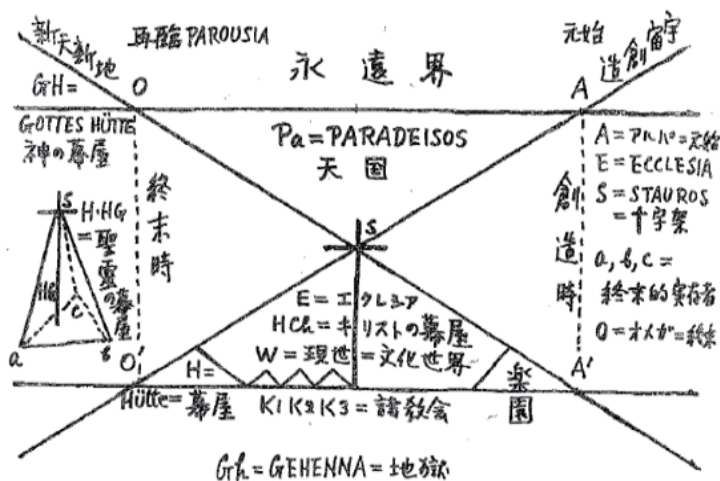
キエルケゴールは、

「天才は少い。しかしながら、クリスチャンはもつと少い」

と言いました。本当のキリスト者とはそういうところを持つものだから、天才よりももうひとつ質の違った世界だぞと。「それじゃ困った」なんて。困らない。みなさん、一人びとりが天才よりも少いクリスチャンになる。キリスト者ほど本当は無数にあり得るものは他にない。即ち、一切をキリストのものにする万人救済の本願を、キリストは持つておられる。

● 神の歴史(幕屋) 図

わたしは、かつて曠愛新書(第三号)にこういう図を書きました。これ(AO)は天界の線です。これ(AO)は地界の線で、これは悪の幕屋の世界。その中にいろいろな教会、集会、幕屋というキリストの群れ、エクレシヤがある。現実、この悪の勢力の方が一応強い。



けれども、一応強いやつをなおひつくるめて、ぐつと掌握しているのがキリストであります。キリストのエクレシヤ。十字架(S)が立っている。この悪の幕屋が、キリストの本願は、全部ひっくり返って、天上に投影している。ひっくり返ったら、それが本当の本願成就なんだが。ところが、なかなかこれが行かなくて、こちら側に地獄の淵(Gh)がこんなに大きく開いている。神の救いの時は動いている。そして、ここが最後の審判の時(OO)です。それから、これは本天国、新天地の世界。ここは今、仮天国(Pa)。

我々が十字架の門を通って、次の世界に行くところは、これはまず仮天国のパラダイスです。パラダイスから、本格的なパラダイスは最後の審判を通して行く。この仮地獄の中にいる者たちは、ここでとりなしでもって救い上げられることもあると思いますが、それでなお聖霊に逆らっていたら、今度は本地獄の中に入ってしまう。「第二の死」というやつがある。黙示録の中に書いてある。この第二の死にぶつかったら、おしまいということですね。

9 なんじら我に学びしところ、受けしところ、聞きしところ、見し所を皆お



こなえ、さらば平和の神なんじらと偕に在さん。

¹⁰ 汝らが我を思ふ心の今また萌したるを、われ主にありて甚く喜ぶ。

やはり、ピリピの教会といえども完全な教会でない。

いずこの教会、いずこの集会も、破れ幕屋であります。私たちも破れ幕屋です。破れ幕屋で——つぎなんか当てなくてもいいですよ、破れたままで——星が見えるから。どうぞよく星を見てください。つぎなんかあてようとするから、人間的なつぎあわせになるから、いよいよおかしいことになる。だんだんおさら破れてしまう。そつとしておいた方がいい。そして、星と太陽の光を受ければ、今に天衣無縫の幕屋になってしまう。天衣無縫。天の衣がきてしまう

●一切の秘訣

汝らは固より我を思いいたるなれど、機を得ざりしなり。¹¹ われ窮乏によりて之を言うにあらず、我は如何なる状に居るとも、足ることを学びたればなり。

¹² 我は卑賤におる道を知り、富におる道を知る。また飽くことにも、飢うることにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。¹³ 我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり。

今日の主題はここである。

「一切の秘訣」

と題しました。第四楽章のひびきは、「一切の秘訣」という響きである。なぜかというと、それは、

「私を強くし給う者によつて」

あなた方はこう言われると、「まだ私は弱いな」と、そういうように読んだらだめですよ。

「わが力となり給う者によりて」

と読みなさい。私が強くなつたつて、そんなものはあてにならない。

「私の中に入つて力となり給う者」

これは私がのけようたつてのけるわけにはいかな力なんだから。私より力強い力なんだから、のけようがないじゃないですか、そういう力が入ってきたら。「お前は出て行け」と言つたつて、出て行きはしませんよ、そういう力は——それは「お前」ではないんだから——強くし給うところの素晴らしいものは主の力です。

「わが力となり給う者によりて、その者が一切をなし給う」と、そういうわけです。ヨハネ伝に書いてある。

「汝ら我に居らずば、何事もなしあたわず。私の中にいなければ、何もできない」と。これはキリストの告白なんです。

「われ、神の内にいなければ、何もできない」



と、キリストはそうなんです。教えているんじゃない、告白しているんだ。

「私は父のふところの中に居なければ、何も言えない、何もできない男だ。そうしたなら、お父さんが入ってくれた。この事態が、義であり、愛であつた。お前たち、このお父さんの義と愛とをいただいているこの私を受けなさい。そうしたら、お前たち自身が義となり、愛となり、力となるよ」

と。というのは、

「みんな中にいるから、義がござる、愛がござる、力がござる」

と。これが福音です。私は大胆に訳したい。たとえば今のところは、

「我を強くし給う者によりて、凡ての事をなし得るなり」

なんて訳さない。

「わが力となり給う者によりて、一切の事をなし得る」

と、私ならそう訳したい。

●文殊菩薩

一切の秘訣を得た人の話をちよつとしておこう。皆さん、文殊菩薩^{もんじゅ}という人を聞いてますね。文殊が一夏のうち、一か月は祇園精舎に過ごし、一か月は童子の学寮に過ごし、一か月は酒肆淫房に過ごす。これを聞いたところの架葉(釈迦の弟子)が憤然として、

「いやしくも文殊菩薩ともあろう者がけしからん」

と、お釈迦さんに告げて、これを罰することの許可を得た。

「よからう」

と、お釈迦さんが言つたので、文殊を打とうとして、大衆を集めて、槌で三度たたこうとしたが、槌重くして上がらず。のみならず、大衆中ただ一人の文殊であつたのに、不思議にもしだいしだいにそこに居る並みいる人たちの顔が文殊のような顔にだんだんなつてきた。最後には、打とうとした自分自身まで文殊となつてしまったという。

文殊が一夏を三所に過して、教育の場においては、林間学校で仏の世界を教えさとしてきた。酒肆淫房においては、その人たちを仏の世界に救済した。遊女と食を共にして、キリストはあそびめを救つた、マグダラのマリヤなんていうのを。

であるからこそ、一夏を三処に過ごし得たのである。かくの如き自在な妙境を文殊は身に体していた。これは文殊が一切の秘訣を得ていたからです。

私たちは、これから下界といいますが、街のちまたに帰つて普通の生活に入ります。「一家揃つて福音」という家はなかなか少い。ナザレのイエス・キリストも、

「預言者はふるさとにいれられず」

と言つて、ナザレをお出になつた。身近の者は、「なんだ、これはこのごろ不思議なことを言つたりしたりするなあ」なんて言つて、一番身近の者にわからない。



そういうような、まわりが不信の逆まいているような環境。そこに処して、それと相對の氣持でやっているうちはだめですよ。ある時はそれと調子を合わせ、ある時は知らんぷり、いろいろある。そのいろいろな姿の基調は何かというと、相手を本当に愛しているということです。愛するとは救い上げようとするその悲願。何とかしてこの福音の世界に入れてあげようとする悲願をもつて対して行く。これが腹のどん底にあるならば、どんな事態であつても決してそれに負けない。これは次元が違ふんです。同じ次元で、「私の信仰でひとつあれに勝つてやりましょう」なんてはだめですよ。

そういう、どん底の担いの心。そして、それは何かというと、もちろん、その中に担いの実力が来てなければならぬ。担いの実力。我を強くしたもう、いや実にわが力となり給うところの御霊。力ある御霊。力ある御霊は敵を倒す力ではない。救い上げる力である。

「汝、敵を愛せよ」

とは敵を担い上げるということ。なにか人間の感情で、「愛せよ」なんて、そんなことじゃない。そんなことと思うから無理がいく。偽りの感情になる。「この野郎」と思ったつていい。「この野郎、ひとつ救つてやろう」と。それが本当に「敵を愛する」という姿。とうとう福音の世界に導かれなかつた。いいです。その人は倒れていい。その人の死を越えて、何ものかが作用している。我々の勝利というものは、この世で現象しなくて一向差しかえない。

「この輩、黙さば石叫ぶべし」

と。キリストの福音の世界はそのような世界である。なんと主さまはすばらしい、すさまじい力の透徹した、「愛」という言も表せない、何ものかであるという感じがしますね。こういう福音にぶつかつて、どこに行けますか。

私たち自身が文殊さん以上の世界に、「主さま」で質的に入つて行く。どうぞ、決して現象面や結果面や、そんなことは苦にしないで、いちずに行つてください。

●而無不能也

「一切の秘訣」に非常にふさわしい所を『列子』の中でみつけた。
皆無為之職也。

能陰能陽、能柔能剛、能短能長、能円能方、
能生能死、能暑能涼、能浮能沈、能宮能商、
能出能没、能玄能黄、能甘能苦、能羶能香。

無知也、無能也、而無不知也、而無不能也。

「みな、無をばこれが職となせばなり。

よく陰よく陽、よく柔よく剛、よく短よく長、よく円よく方、
よく生よく死、よく暑よく涼、よく浮よく沈、よく宮よく商。
よく出よく没、よく玄よく黄、よく甘よく苦、よく羶よく香。



知ることなく、よくすることなく、而して知らざることなく、而してよくせざることを
なきなり」

とある。シナ人の中には老子だとか、列子だとか、旬子なんてやつは桁違いなことを言っているが、福音の光で見ると、「ああ、そうだそうだ」というふうになるでしょ。畳み掛けて言っているわけです、パウロの書簡のあるところみたいに。パウロの著作に大いに照応するようなところだね。こういうように言っているものだから、やりきれんです。

「而無不知也、而無不能也」

「しかして、知らざるなく、また能わざるなし」

という。これは全く我々の福音の事態と同じ事態、同質の事態です。

何もできないという、そういったわきまえ、そういった職能。完全落第者。学校から出て行けというわけだ。この世の学校から出されると、今度は天国の学校に入れてくれるんだから有難い。

そうすると、「陰か、陽か」なんて言っているのではない。物事はよく陰陽といわれる。すべてのものは陰陽をもつてつかむことができる。しかも、その何もできないやつが、「よく陰に、よく陽に」と。ある時は陰となり、ある時は陽となる。またある時は柔であり、ある時は剛である。どちらも自由自在なんです。短くもなれば長くもなるし、丸くにもなれば、四角にもなる。生きているかと思えば死んでいる。

「常にイエスの死を身に負う、これイエスの生命の表れんためなり」

と。これはパウロは、「能生能死」（よく生、よく死）ということを経験してキリストにあつてちゃんと身につけているわけです。浮きつ沈みつ、どちらでも結構。これは泳ぎの秘訣です。浮こうなんたつてダメです。沈むなんてこわがつたつてこれもダメ。沈む時には沈んで行く、浮く時には浮く。

あのコーサ号の鹿島君が週刊朝日に書いている。

「自然と戦おうなんて思ってたつてダメですよ。自然に従った。私は自然のまにまにやった。嵐がくれば嵐にまかせた。潮がくれば潮にまかせた。これが大平洋を渡った秘訣であつた」

と言う。自然の動きの呼吸に乗って、それによつて動いていたという。さすがにと思つて、私は本当に感心した。

内村鑑三先生も大自然が好きだった。内村先生は自然を愛した。自然を愛する人は芸術家です。

「最大の芸術家は神さまである。本当の芸術はこの神にならうのである、神に従うのである」

と、シラーはその「キュンストラー（芸術家）」という詩の中で書いている。

無色は無限色に千変万化し得る。キリストは無色の人だ。何々主義なんてもので、絶対



につかまえることができない。ゲートも言っている、

「お前たち、イズムにこつてはだめだ。人間の世界が本当に一つとなるためには、一切の主義主張を乗り越えて全部包摂するような、そういう境地にならなくては。

と。それぞれのイズムを持ったつていいよ。けれども、イズムが最後だと思つたら、とんでもないまちがいだ。人間は人間でみんな目は二つで、鼻は一つで、耳は二つと、どこの人種だつて同じじゃないか。

そういう一番深いところの人間性というものを本当に掘り下げて、人間性をもつて本当の人間として交われ。」

と。しかし、「本当の人間」とはどういう人か。完全に自分を抜き去つてしまつて、本来無色という、無為なところの、これがキリストじゃないですか。キリストは無為となつて神一切となつたら、これが本当の人間中の人間、自然よりも自然なる人となつた。福音というものは、何とかかんとかいう信条なんかで説明のできるようなものじゃありません。

皆さんは本当に、大自然を見て、無風でもそよ風でも台風でも、「ああわが友よ」というようなことになってください。ベートーベンの第六シンフォニーもそうだよ。始めはせせらぎの音があつて、いい気持ちになつていると、そのうちにガッツと天来の響きがきて、それから嵐一過でスーッとまた戻る。あの第六シンフォニーは素晴らしい。あれもベートーベンというのはさつさと自然の中に入つて、そこでもつて靈感にふれて、グワーツとやるわけです。

だから、何もできない。「知なし能なし」(無知無能)、絶学絶慮、学に絶し慮に絶する。そこが本当の学を進め、本当の慮^{おもんばか}りを展開する世界である。

しかるが故に、さればこそ、

「しかして知らざるなく、また能わざるなし」(而無不知也、而無不能也)

と。絶対矛盾の自己同一というやつ。本当に十字架されて、聖霊をいただいてごらん下さい。こういう呼吸がわかる。こういうものを讀むと、「ああ、わが友、列子よ」ということになるわけです。これが「一切の秘訣を得たり」ということを語つていところの、列子の告白であります。

●天下大治

もう一つ面白い話がある。黄帝という王さまがいた。これが即位してから始めの十五年間は大いに国民の支持を得て、したい放題のことをしたそうです。だから、どうも身心疲れてしまった。これはいかんというので、次の十五年間には大いに政治に心を用いてやつてみたところが、だめである。今度は大いに心を改めて努力精進してみたがだめだ。そこで、政治も宮殿も従者も捨て、歌舞音曲もやめてしまつて、雲に水を飲むような極めて仙人のような生活に入つていった。そして、大自然の粹を吸つて生きるようになった。三か月も



経ちましたら、ある時、眠りに陥った。そうしたら、夢の中で華胥^{かそ}の国へ運ばれた。中国から何千里はなれているかわからない。そういうところには神游^{しんゆう}でのみ行けると書いてある。霊に乗っかって行くことを神游という。

エゼキエルがこの神游状態でもって枯骨の谷に行つて、枯骨の復活の天の啓示を受けました。エゼキエル書37章。「霊にて出^{いで}ける」と書いてある。

そして、その華胥の国を見たら、別に特定の支配者も居なければ、民の生活は実に自然である。技巧がない。生死に対する執着もなければ、すったもんだというねたみや争いもない。利害打算もない。そういう国の状況を見せられた。そこで、目が覚めてから、彼は自分の所に帰つて来まして、それから二十有八年、夢で示されたその呼吸をもつて政治をしたところが、いわゆる政治ならざる政治となつたから、おのずから民はこれに服してきて、「天下大治」と書いてある。天下は大いに治まつた。

これが、新天新地の黙示録の世界の、キリストの世界が、これ以上の意味において、そういう世界である。私たちは、この相対的な混沌たる矛盾だらけの現実でありながら、この天国的な事態を、自分自身がこの相対の混沌の中にありながら、それに対して自由自在に対処し得るような事態となつたらば、この天下大治の呼吸で生きて行くことになるわけです。

どういうふうにあしらわれようとも、パウロが本当に、

「喜び喜べ」

と。「喜べ」というのは、ただ手ばなしで相手を喜んでいることではない。キリストの力ある愛の事態が展開して止まない。それが現象しようがしまいが、もう必ずそれにおいて自分が本当に相手に、相手の知らない光を發し、相手の知らない愛を流して行く。そういうような在り方が、この華胥の国の事態を、天国の事態を、私たち自身が小さな自分の範囲に於て展開して行くことができるわけです。

そういう実存的な在り方が、本当の伝道であります。道を伝えるとは、伝えたる道が知れようが知れまいが、本願がそこに行ぜられている世界。ただ思われているんじゃない、そういう生き方に私たちはされて行く。みたまが来れば、されて行く。そして、それが行かなければ、どこか自分がおかしいことに感ずるわけ。また、いのちが欠けて行くわけですね。黄帝が亡くなった後二百余年間、その威光が止まずという。その二百余年間というものは何かしらんけれども、不思議にその作用がひびいて行く。これはもう霊的な世界のいのちが動いている。

私たち、この世界がどうあろうとも、キリストの作用は世の末までも、地の果てまでも、神の国が来るまでこれは動いている。だから、私たちはそのキリストの作用で動かされている。生けるキリストに動かされているわけです。我々がこのように動かされているのは、私が何かやっているのでは絶対にない。キリストが私たちを、かくパウロの書簡を通して――



「パウロさんがやっているのでもない。パウロを動かしているのはみたまの言——みたまの言が私たちを動かしている。それでありますから、まことに主は我らの中にあり給う。もう人生観じゃないですよ。」

●聖霊の喜悅

少し聖書の中に戻りまして、ヨハネ伝15章を開きます。キリストの直々の御言の中に。有名な葡萄の樹の譬えのところ。

「^{まこと}我は^{ぶどう}眞の葡萄の樹、わが父は農夫なり。」(ヨハネ15・1)

と。お前たちは枝で、幹に連なつてなければどうにもならんと。そして、

「父の我を愛し給いしごとく、我も汝らを愛したり、わが愛に居れ。」(ヨハネ

15・9)

「私に居ることは、即ち我が愛に居ることである」という。

「我これらの事を語りたるは、我が^{よろこび}喜悅の汝らに在り、かつ汝らの喜悅の満さ

れん為なり。」(ヨハネ15・11)

聖霊をいただきますと、もう嬉しくてしようがない。

私たちはこの聖霊に捉えられたらば、もう喜ばざるを得ない。聖霊に打たれながら、「なんのことはない」とやっていたらダメですよ。このように恵まれて、「私はわかった」と、本当に自分の判断でなんか福音の世界は解るか。どうぞ、本当の平伏しをもって、このキリストの中に本当に平伏して、

「私がお前の足を洗ったじゃないか」

「ハイッ、もう本当にありがとうございます」

と、この中に本当に入つて行く。

「それは行きますよ」

と。この私たちの福音はそういう福音であります。私がどんなに大きな声をもって叫ぼうとも、なおそれよりも大きな声が上から来ている。

パウロが「喜び喜べ」と言っているのは、ただ繰り返しているのではない。パウロが止むに止まれずして涙を流しながら言っているに相違ない。獄舎(ひとや)につながれながら、みんなに迫害されながら。このイエス・キリストは、

「お前たちにこの喜びのあふれんためである。私の中に入つて、この生命を共にしたらば、もう喜びが溢れてしょうがないだろ」

と主は仰る。ヨハネ伝16章22節のところにも、

「斯く汝らも今は憂あり、

いろいろ憂いがあるだろう、

然れど我ふたたび汝らを見ん、



やがて来るぞ、みたまをもつてやつて来るぞ。

その時なんじらの心喜ぶべし、その喜^{よろこび}を奪う者なし。」(ヨハネ16・22)

聖霊が来て、この喜^{よろこび}にはいったら、誰がこの喜^{よろこび}を奪うことができるか。この世の何ものがこの喜^{よろこび}を奪うことができるか。この世の何ものがキリストのこの愛から私たちを離れしめることができるか。キリストの愛は私たちの本当の喜^{よろこび}の内容である。これがみたまの喜^{よろこび}びです。

「この喜^{よろこび}を奪うものなし」

と言っておられるじゃないですか。パウロは、奪われざるところの喜^{よろこび}びを発して、ものを言っている。まさにパウロはキリストのこの言の身証者である。

17章にも出ています。

「今は我なんじに往く、而して此等のことを世に在りて語るは、我が喜^{よろこび}を彼らに全からしめん為なり。」(ヨハネ17・13)

「神さま、あなたのもとに、今こそ私はこれから参ります。十字架を通って参ります。復活して参ります。私が往きましたら、今度は、彼らの中に私は入ってきて、彼らの喜^{よろこび}びを満たさんがため、本当に一つになって進んで行くため。そして、そのことによって、あなたの御栄光が現われるためであります」

と、キリストは17章の祈りにおいて、「一つ、一つ」とここでも言っておられる。

皆さん一人ひとり、いろいろな集会有りますね。いいです。その一員一員は、一人ひとりが全集会を担っているんですよ。「多」であると同時に「一」であるということは、そういうことです。一人ひとりが全集会を担っている。「ああ、いいです」と言つて、一人ひとりが担っている。そういう集会有絶対にくずれません。どんなことがあっても崩れないで進んで行く。これはキリストの「一つ」である。ところが、「あいつがこうだから、あの人があだから」と、そんなことを言っている集会有みんな分裂していく。私みたいなダメなやつが、皆さんの先頭に立ちましてやっているんだが、このダメなやつを見ていたら、みんなダメになります。ダメなやつ、無能者の、奥の世界を見ていたら、そうしたらば、私の如何にかかわらず、皆さんはどしどし進んで行きます。私を見てた人はみんな脱落して行く。

内村鑑三先生もそうだ。藤井武先生も、

「私を見て直接に自分をなんとか言うやつは蹴飛ばすぞ」

なんていうようなことを言つた。

「そういうことではないよ」

と。どうぞ、皆さんたちは、私にもし現われているものがあるならば、それを見てください。無ければ、

「ひとつ先生を補なつて行きましょう」



と仰ってください。私はそういう兄弟姉妹たちにまた励まされて行きます。それが担いの「一」である。この担いの一というものが本当に「多」を「一」にして行くところの一である。

●終末的歡喜

どんなことがあっても、もうこのキリストの喜びを奪うものはない。こういう喜びは、「エスカトロギッシェ・フロイデ」「終末的な歡喜」という。こういう「エスカトロギッシェ・フロイデ」なんていう言葉はドイツのどんな註解書にだって書いてありませんよ。

この終末的現実をいただいて、黙示録の新天地の世界を現にいただいている。私は、黙示録はとっておきで、なかなかこれを講じようとはまだ思わない。時至るまで。この最後の新天地の希望を——いわゆるあこがれとしての希望じゃない。そんなものは願望という——黙示録の世界は質的には既にいただいている。けれども、もつと私が祈り深くなり、ある時が来て、

「さあ、お前、黙示録をやれ」

と言うまではやらない。うっかり手なんか出したらいかん。パトモスのヨハネが祈りの世界にすっかり入って、その世界を見せられて、その言を聞きながらぐんぐん書いた世界です。から。「想像」や何かでは絶対にない。そんなものはいい加減に想像したり研究していられるかというわけだ。けれども、でありながら、これを読んで、「本当に」と言つて共感できるのは有難いすけれども。

藤井武先生が黙示録にかかつて一年間、黙示録の講義をした。黙示録を終つたら、そのあと二週間で向うへ逝つてしまった。6月30日です。最後の黙示録22章の講義して、それで終つた。

「小池君、ご苦労さんだった」

と、私はその言葉は忘れません。そうしたら、先生は二週間あとに忽然として天界に逝つてしまった。藤井武全集第六巻の中に、私はその記憶と祈りを込めて毎晩毎晩書いて、30項を一か月で書き上げた。

終末的な喜びは、これを何もかも奪うことはできない。この喜びの世界はイザヤ書35章10節、「砂漠はサフランの如く」というところ、本当に喜びの溢れたところだ。

「エホバに贖いすくわれし者、うたうたいつつ歸りてシオンにきたり、その首こうべにとこしえの歡喜よろこびをいただき、楽しみとよろこびとをえん。而して悲哀かなしみと

なげきとは逃げさるべし。」(イザヤ35・10)

と書いてある。これが「エスカトロギッシェ・フロイデ」「終末的な歡喜」という。既にイザヤはその世界を示されて、

6) 「めしいの目はひらけ、耳しいは耳がきこえ、足なえは立ち……」(イザヤ35・5、



という。この預言をそのまま現実にしたのがキリストであった。ただ「癒し」なんてことを言っているんじゃない。キリストは最後の世界のその「徴」を与えられただけのなし。最後の世界は、そういうこの世の欠陥が全部充たされて、主を讃え主を信じて行く者は、全部充たされて行くぞと。この天界の世界に私たちはとうとう今日は舞い上がって行つた。そういうような現実です。

●羔の婚姻

エレミヤ記31章12節、13節、これも終末的現実を歌っているところですよ。

「彼らは来りてシオンの頂によばわりエホバの賜いし福なる麦と酒と油および若き羊と牛の為に寄り集わん。その靈魂は灌う園のごとくならん。彼らは重ねて愁うること無るべし。その時童女は舞いてたのしみ壮者と老者もろともに楽しまん。我かれらの悲しみをかえて喜びとなし、かれらの愁をさりとてこれを慰さめん」

イザヤ書の中にはまだ他にあります。25章にもあります。いちいち開きません。詩篇126篇がまたそうです。そして、黙示録の19章を見ると、これはある意味において、もう黙示録の讚美の洪水みたいところですね。ずっと「ハレルヤ」から始まっている。6節のところに、

「私はまた、おおいなる群衆の声おおくの水の音のごとく、はげしい雷鳴のようなもの聞いた。それはこう言つた『ハレルヤ、全能者にして主なる我らの神は王なる支配者であられる。私たちは喜び楽しみ神を崇めまつる。』」(黙示録19・6)

7)

「羔の婚姻」の時とは、キリストを信じる者は神の国に招じられて、主を夫とし、すべてのエクレシヤ全部が新婦として迎えられるということを「羔の婚姻」という。

藤井先生の詩が『羔の婚姻』というのである。現代詩集の中に藤井先生の詩がない。何という霊盲のことであるか。いわゆる詩人でないと、その中に入らない。隠れたる本当の詩人はのけものである。藤井先生の『羔の婚姻』が、日本の最大の叙事詩が載つていませんよ。

先生を通して現われたこの真理は、みんなに知らせる義務がある。宣伝でも何でもなし。パリサイ的な妙な「純粹」とかいうのはだめ。福音の世界は、主のためには恥を担つても、現わしていかねばならない。

私が、もし聖者のような者でなければ、福音を説くことができないのなら、私は今日、止めなければならぬ。この土の器、破れの器を通して、キリストは福音を宣べ伝え給うから、ひれ伏しながら語っているんです。



「羔の婚姻の時に来て、はなよめはその用意をしたからである。彼女はひかり輝くけがれの無い麻布のキリストから賜わったその衣を着ることを許された。」（黙示録19・7～8）

衣を着ることを許された。自分で着たんじやない。許されて、新婦とせられた者であります。皆、すべてあがなわれたる民である。天国には贖われざる民なんてものは一人もない。よく「聖」何々なんていうね。パウロだつて「聖パウロ」なんて言わなくなつていい。「パウロさん」で結構だ。もちろん私は変なケチをつけているのでもなんでもない。「聖」というのは、聖とせられたる者であつて、自分で聖となつたんじやない。「聖者」^{しやうじや}は神ひとりである。「聖者はいと低く下つて、心の碎けたる者の霊をいかし、その心の中に共に生くる」

と、イザヤ書57章15節に書いてある。

● 歓喜に寄す

そういう福音の喜びの、大歓喜のところが黙示録の終りの方であります。

『歓喜に寄す』（An die Freude）という詩をシラーが書いた。ベートーベン、シラーというこれが有名な第九シンフォニーであります。シラーは喜びのことを「神の火花」といいました。

「歓喜よ、神の火花、

楽園の娘よ」

"Freude, schöner Götterfunken,

Tochter aus Elysium"

「神の火花、楽園の娘」と言いました。さすがに詩人ですから、表現が素晴らしい。歓喜^{よろこび}は神の火花、すなわち、聖霊から発するところの火花が我々の喜びである。

「我々はその至聖所に入つて、

その天的な喜びに入つて、そしてその喜びに於て、

すべての人々は兄弟姉妹となる、

汝、喜びの翼が静かに憩うところに。」

と。第九シンフォニーが始めて演奏された時に、拍手が鳴り止まずして、警官がとうとうこれを抑えたという。ベートーベンはその拍手が聞こえなかった。仕方がないから、ベートーベンをぐるっと回して、ある女優が「あのとおり皆、喜んでいます」と教えた。彼はうなずいて、微笑を浮べたという。そのほほえみが忘れることができないと、ある人が語っています。あの中に私の好きな句がありますが、

"Seid unschlungen, Millionen!

Diesen Kuß der ganzen Welt!

Brüder, überm Sternenzelt



Muß ein lieber Vater wohnen."

「幾百万の人たちよ相抱け、

この接吻を全世界に及ぼせ。

星の幕屋の彼方には、

愛の神ぞ住み給う。」

という、こういう詩です。

「喜びこそが道案内であって、

我々が知らざるところの、

偉大なる神さまが在り給う世界に、

我々を導いてくれるものは、

この喜びという道案内である」

というようなことをまた言っているところがある。

また、ダンテの詩の『神曲』を開けば、いくらでも出てくるから、それをいちいちやっている時間がなくなるのでやめますが、『神曲』の第三曲の52〜54節に、

「聖霊の^{ようこ}飲びにのみ

焰^{ほのお}を発する我らの愛は、

神の秩序により

形造らるるままに飲ぶのである」

という句があります。聖霊の喜びにのみ焰を発するところの、我々のこの愛であって、これは神の秩序によって、本当に我々が形成されるままに喜んで栄光を現わす、という意味であります。

●喜びの音信

もう、喜びの音信^{おとずれ}であって、その他の何ものでもない。この喜びは、人を喜ばせるところの喜びでありまして、自分でただ自己満足している喜びじゃない。喜びを与えるところの喜びである。だから、パウロが

「喜んでくれよ。さあ、私と同じように喜んでくれ」

と。どんなことがあっても、このキリストを喜ばないで何を喜ぶか、ということでもあります。ペテロ後書3章8節に、

「愛する者よ、なんじら此の一事を忘るな。主の御前には一日は千年のごとく、

千年は一日のごとし。

私たちのこの一日はまさに千年の一日であります。

主その約束を果すに遅きは、ある人のおそしと思うが如きにあらず、ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、



神の本願は万人救済にある。内村鑑三先生が、
「この私みたいな者が救われたんだから、万人は救済される」
と言われました。

ただ一人の亡ぶるをも望み給わず、凡ての人の悔改くいあらために至らんことを望みて、
汝らを永く忍び給うなり。」(ペテロ後3・8)
「されど主の日は盗人のごとく来らんきた、その日には天とどろきて去り、もろもろの天体は焼け崩れ、地とそこにあるわざとは焼けつきん。斯く此等のものはみな崩るべければ、汝等いかに潔き行状と敬虔とをもて、

行と信とをもつて、

神の日の来るを待ち、之を速かにせんことを勉むべきにあらずや、その日には天燃え崩れ、もろもろの天体焼け溶けん。されど我らは神の約束によりて義の住むところの新しき天と新しき地とを待つ。」(ペテロ後3・10～13)

こういうようなさかんなる待望。そして、それは私たちが本当に喜びを内に宿すが故に、本ものとなって来るところの事態であります。

これは私の歌ですけれども、

「天つ靈風かぜはらみはらみてひたぶるにはせてぞ往かめ御国への旅」

「天つ靈風」とは聖霊のことです。

「久方の栄光ひさかたひかりを浴びてこのむくろいつこにあるとももしびとなれ」

次は宮本武蔵の歌です。

「思いなくたくみもあらぬ無想には虎さえつめのおきどころなし」

思いも巧みもない。宮本武蔵の剣は無想の剣である。敵を倒そうなんて思っているのではない。剣をにぎって剣は手にない。無剣である。無剣の剣となった時に本当の剣となるわけです。「虎さえつめのおきどころなし」と。そういう無想の境地。みどりごを悪魔は誘惑することができない。沢庵禅師は素手で虎のおりに入って行って、虎の顎をなでてやったら、虎は沢庵の手をなめたという話です。沢庵禅師もまさにその境地に入っていた坊さんです。

私たち、この一切の秘訣の世界はキリストにあつて、皆さん一人びとりが、

「パウロさん、そうです。一切の秘訣を得ました。何かしらんが、そういう境地が

私の中に泉して来ました」

ということにいいよなつて、いいよ泉して行つてください。

かくして、私たちは、本当にこの三日間のピリピ書の旅路、この大交響楽四楽章、ベートーベンの第九シンフォニーもあるいはと思われるような、そういうパウロの書簡にのり移つてここまで参りました。感謝致します。終わります。

